



**Data**

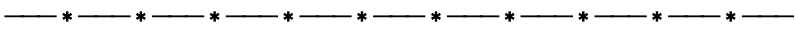
監督：ジョン・タールトロープ  
 原作：スティーヴ・オルテン  
 出演：ジェイソン・ステイサム／リ  
 ー・ビンビン／レイン・ウィ  
 ルソン／ルビー・ローズ／ウ  
 インストン・チャオ／クリ  
 フ・カーティス／ソフィア・  
 ツァイ／ベイジ・ケネディ／  
 ロバート・テイラー／オラフ  
 ル・ダッリ／オラフソン／ジ  
 エシカ・マクナミー／マシ  
 オカ

## 👁️👁️ みどころ

サメ映画は『ジョーズ』（75年）以降たくさんあり、“サメ映画30選”も可能だし、“サメ VS 人間！名勝負数え唄13戦！”も可能らしい。しかし、体長23メートルもある巨大サメ“メガロドン”通称“メグ”の凶暴性はケタ違いだ。そんなサメがなぜ今、人間の目の前に登場したの？さらに、ラストでは“東洋のハワイ”と呼ばれる“三亚”の海水浴場にまで・・・？

サメを巡るそんな興味その他、アメリカ、中国映画の本作では、ジェイソン・ステイサムと中国の美人女優、リー・ビンビンの共演に注目！ファン・ビンビンは目下、所在不明だが、リー・ビンビンはチョー元氣だ。

9月25日に“第3弾”が発動された米中貿易戦争は“危険水域”に突入したが、こと映画づくりに関しては、資本と観客を求めてハリウッドは中国に急接近！本作ではそんな現実と共に、日本の立ち位置についてもしっかり確認したい。



## ■対中関税第3弾発動！すわ“米中貿易戦争”勃発か！■

2018年9月25日付各紙の一面には、「貿易戦争 危険水域に 米中、関税第3弾発動」（日経）、「米、最大の対中関税発動 日用品など2000億ドル分 中国も報復」（読売）、「米、対中制裁22兆円発動 第3弾 中国は報復6.7兆円」（産経）、「米、対中関税第3弾発動 輸入品の半分対象に 中国は報復」（朝日）の見出しが踊った。これに対して、「中国も600億ドル相当の米国製品に5～10%を上乗せする報復関税を即日実施、両国の貿易戦争は互いの輸入品の5～7割に高関税を課す危険水域に入った。」（日経）とされている。

2017年1月の“アメリカ・ファースト”を至上命題とするトランプ大統領の登場以降、早い時期(2017年4月)に“米中首脳会談”が開催されたし、2018年6月にはシンガポールで史上初の“米朝首脳会談”も実現した。そのため、米中関係はもとより、南北朝鮮問題を含む東アジア全体の問題(緊張関係)が“緩和”、“改善”の方向に向かうかに見えたが、さて現実はどうなるか? 米中貿易戦争の拡大と泥沼化によって、今後の米中関係は10年、20年と緊張状態を余儀なくされると指摘する専門家も多い。このように米中関係は今、政治的、経済的、軍事的に大いなる緊張関係にあるが、他方、映画業界では……?

## □■ “米中貿易戦争”を尻目に映画界では……? ■□

映画業界では既に“中国側の勝ち”が明確になり、米国(ハリウッド映画界)は映画を作る資金についても、映画を見てもらう観客についても、中国のご機嫌を伺い、中国の意向に沿いながらやっていたいかなければならない現実になっている。それは、サンドラ・ブロックとジョージ・クルーニーが主演した『ゼロ・グラビティ』(13年)における、中国の宇宙ステーション天宮と中国の有人宇宙船・神舟の大活躍をみればよくわかる(『シネマ32』16頁)。また、中国の第五世代監督を代表する張藝謀(チャン・イーモウ)監督が、ハリウッドの大スター、マット・デイモンを主役に起用した中国・アメリカ映画『グレートウォール』(17年)には、「イーモウ・ガール」としてチョー美人の司令官が登場するうえ、女性ばかりで構成された華やかな鶴軍も登場し、見どころいっぱい映画になっていたから、ビックリ(『シネマ40』52頁)。

本作と同じ日に観た『スカイクレーパー』(18年)はアメリカ映画だが、舞台は香港だったし、地上1000メートル越えの超高層都市「ザ・パール」の設計者も中国人という設定で、中国資本に頼っている映画だった。しかし、本作は製作費や出資金比率こそ明らかにされていないが、『グレートウォール』と同じアメリカ・中国映画で、準主役は李冰冰(リー・ビンビン)。本作では彼女が冒頭からラストに至るまで、『グレートウォール』でみた長城を守る美女軍団の司令官以上の役割を演じるので、それに注目! さらに、そのバックにある中国資本と中国の観客にも注目!

## ■□■ 範冰冰は消息不明だが、李冰冰はチョー元気! ■□■

“美人で頭がいい”女は“できる女”の1つのパターンだが、今やスクリーン上では更に“アクションもできる女”が不可欠。それは『宗家の三姉妹』(97年)(『シネマ5』170頁)で有名な楊紫瓊(ミッシェル・ヨー)が『007 トゥモロー・ネバー・ダイ』(97年)等でみせた素晴らしいアクションをみれば明らかだ。また、『初恋のきた道』(00年)(『シネマ5』194頁)で日本人観客に鮮烈な印象を残した、“中国四大女優”の一人である、章子怡(チャン・ツイイー)も『グリーン・デスティニー』(00年)や、『HERO(英雄)』(02年)(『シネマ5』134頁)、『LOVERS 十面埋伏』(04年)(『シネマ5』353頁)では、素

晴らしいアクションを見せている。しかして、本作には、父親のジャン博士（ウィンストン・チャオ）が投資し運営する、大陸から200マイル（約320キロ）離れた海洋の研究施設の責任者スーイン役で、李冰冰（リー・ビンビン）が登場する。彼女は一方では生物学者として巨大サメ“メガロドン”の研究に従事しながら、他方では深海に潜って深海を探索する探査艇に乗り込み、それを自ら操って、さまざまなアクションを展開するので、それにも注目！

本作冒頭、ハリウッドのアクション俳優としておなじみのジェイソン・ステイサムがレスキューダイバーのジョナス・テイラー役として活躍する姿が描かれる。そこでジョナスはやむを得ず“ある決断”をし、同僚を死なせてしまうことになるが、それは彼がメガロドンを目撃したためだ。しかし、ジョナスの言葉を信じる者は誰もいなかったため、ジョナスは失意のうちに海難救助の一線から退くことに……。本作の本格的ストーリーが始まるのはそれから5年後のことだが、その時ジョナスはタイで飲んだくれ生活をしているから、アレレ……。

他方、ジョナスの元妻のジャックス（ルビー・ローズ）は今も海洋研究者としてスーインと同じ研究施設で働き、彼女も探査艇に乗り込んでいたから、本来なら本作はジョナスとジャックスとの夫婦愛を軸に描かれるべきものだが、実際は……？現在、中国ドラマ『武則天—The Empress—』に主役として登場している範冰冰（ファン・ビンビン）は、脱税疑惑の中で、現在消息が途絶えているが、リー・ビンビンは本作でめっちゃくちゃ元気な姿を見せているので、それに注目！

## ■巨大サメ“メガロドン”通称“メグ”に注目！■

私は最近「教えて！goo」のコラム「教えて！ウォッチャー」から「UMAが登場する映画3選」の注文を受けたが、そこで、真っ先に思い出したのが『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）（『シネマ41』10頁）と、ポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』（06年）（『シネマ11』220頁）だった。しかし、その時点で本作を観ていれば、本作にみる巨大サメ“メガロドン”は、注目すべきUMAだから、本作をUMA映画の1本として推薦していたはずだ。

サメ映画は『ジョーズ』（75年）以降たくさん作られてきたが、本作の“憎まれ役”として登場するのが、巨大サメ“メガロドン”通称“メグ”。これは200万年前に実在した最恐の巨大サメだそうだが、何故それを目撃した人間はジョナスひとりだけだったの？世界で一番深いと言われているマリアナ海溝を突き破って、更にその下にある（はずの）未知の海溝を探索していくジョナスの元妻ジャックスたちのチームと、ステーションの中でチームと連絡を取り合うジャン博士たちの会話は興味深い。それは私たちのレベルでも十分納得できる会話なので、それに注目！それが理解できれば、メグが突然人々の目の前に登場してくるストーリーもわかるし、そこに十分な説得力があるはずだ。また、体長23メー

トルもある生物学の常識を超えたメグについては、パンフレットに「想像を絶する巨大モンスター」「史上最悪の殺戮マシン」「尽きること無き食欲」「生息地は深海のロストワールド」等に分けて詳しく説明されているので、それをしっかり勉強したい。また、パンフレットには「SHARK FILMS サメ VS.人間！名勝負数え唄 13 戦！」「まだまだあるぞ！そんなサメが大好きなあなたに向けたサメ映画 30 選！」もあるので、それもしっかり勉強したい。

他方、本作では研究所の探査チームが危機に陥ったと聞き、当初は「二度と海には潜らない」と宣言していたジョナスが、研究所に入り、スーインと共に救助作業に入るところからジョナス達とメグとの戦いがスタートする。そして、当初は圧倒的にメグの方が強いと思われていたものの、メグの中に大量の薬物を撃ち込むことによって、見事ジョナス達の勝利となっていく。そこまでは想定内の範囲内で、それだけでも十分面白いが、本作はそれ以降もアッと驚く“第二楽章”が続いていくので、それに注目！ちなみに、ここではサメとクジラの違いが1つのポイントになるので、その方面のお勉強もしっかりと。

## ■ラストの舞台は“東洋のハワイ”こと“三亚”に！■

『ジョーズ』が世界中に大きな衝撃を与えたのは、何といっても人食いザメが海水浴客でごったがえす海水浴場に出現してきたため。しかし、本作では海洋研究所のジャン博士たちがパンドラの箱を開けるかのように、マリアナ海溝の底にちょっかいを出したため、更にその下の海溝で生息していたメグを海中に呼び出してしまったのが大問題。しかし、本作前半のストーリーは、そんなメグとジョナスたち研究所のチームとの戦いだったから、メグが世間の目に触れることはなかった。しかも、こんな凶暴なメグに自分たちだけでは到底太刀打ちできないとさつたジャン博士は研究所の撤退を決めると共に、メグ退治を中国の当局に依頼し、中国当局は2隻の駆逐艦にメグ退治を命じたから、メグ退治は国民の目に触れることなく、中国の軍事力によって粛々と・・・。

本来はそんな筋書きのはずだったが、なんとその後には中国当局にメグ退治を依頼したという話がインチキだったことがわかるから、アレレとなると同時に、中盤での本格的なメグとジョナスたちとの戦いを楽しむことができる。しかも、本作では前述の通り、その戦いに勝利し、勝利の美酒に酔っていると、あつと驚く第二楽章が始まるので、本作後半からはそれも楽しむことができる。

更に驚くのは、ラストに向けた舞台として、『ジョーズ』と同じ海水浴客でごった返す海水浴場が登場することだ。中国海南省の第2の都市である三亚は、“東洋のハワイ”と呼ばれるビーチリゾート地として有名などころだが、同時に中国人民解放軍海軍の南海艦隊の拠点として有名だ。米中貿易戦争のみならず、アメリカとの軍事的緊張関係が続いている中国が本作を契機としてその軍事拠点を見せるはずはなく、スクリーン上で見えるのは明るく開放的なビーチリゾートぶりとそこで楽しむ海水浴客の姿だけだが、その裏では・・・？

それはともかく、そんなビーチリゾート地に“メグ”が登場すれば大変だ。さあ、スクリーン上ではそのシークエンスが如何に・・・？

## ■□■本作の“意義”をまとめると？日本の存在感は？■□■

新聞記事では時々、映画を引用しながら旬の話題を論じることがあるが、2018年9月18日付日経新聞“編集手帳”は、巨大なサメが人間に襲いかかる映画『ジョーズ』(75年)と対比させながら、本作を紹介していた。そこでは本作の特大のスケール感に注目し、「サメは驚くほど巨大でどう猛。主役がハリウッドを代表するアクション俳優ジェイソン・ステイサムと来れば、楽しみぬはずがない。」と書いていたが、実はそこで本当に言いたいことは、「この映画には別の主役がいる。」ということだ。すなわち、それは中国だ。

しかして、そこでは続いて、「ヒロインは中国人、中国のビーチが舞台の1つだと聞けば、この作品が14億の人口を持つ巨大な中国市場を見据えて製作されたことが分かる。」と書かれ、さらに「中国市場は今後ますます大きく口を開き、中華風に味付けされた文化をのみ込んでいくだろう。」と書かれている。そして、その結語は、「この映画には『日本人』も登場する。その役回りは、今の日本を象徴しているのだろうか。」だ。

この記事に大きな共感を覚えた私には、この記事の結語と同じ危惧がある。アメリカ航空宇宙局(NASA)には、優秀な日本人がたくさん参加しており、毛利衛が日本人初の宇宙飛行を成功させたし、その後も向井千秋、若田光一、山崎直子等が宇宙飛行士として活躍している。それと同じように、本作導入部でジャックスらと共に潜水艇に乗り込んでいる日本人スタッフがトシ(マシ・オカ)だが、さて本作における彼の役割は？彼のキャラに照らせば、彼が研究所の最初の犠牲者になるという設定もわからないではないが、いくらアメリカ・中国映画とはいえ、この日本人の扱い方は少しきつすぎるのでは？私はそんな思いを持ったが、さてあなたは・・・？

2018(平成30)年10月9日記